



まことを語れ 腹をなぐるな
もめられれば ぞしくあれど
分かち与えよ この三つにて
まことのしあわせ 得る身とな
らう

「ダンマバダ」三三四
京都女子大学「聖典」
一一二頁



新型コロナウイルス 感染症を縁として

仏教学非常勤講師 小池 秀章

「コロナよりも怖いのは人間だった(神奈川県ドラッグストア店員)」これは、二〇二〇年の「輝け!お寺の掲示板大賞」で、大賞に選ばれた言葉です。新型コロナウイルス感染症(以下、新型コロナウイルス)が広がりはじめた頃、多くのお店でマスクが品切れになりました。その時、いつも笑顔で買い物をしていただお客さんが、新型コロナウイルスにかかったらどうしようという不安から、「どうしてマスクがないの?」「私、常連なんだから取っておいてよ!」などと、そのイライラを店員さんにぶつけたのです。

私は、テレビのニュースで、このような店員さんの話を聞いた時、「非常の時にこそ、人間の本性がでるんだなあ。悲しいことだなあ。」と他人事のように思っていました。しかし、外出の時は、マスク着用が通常になって以来、マスクをしていない人を見ると、思わず睨んでしまいます。私も店員さんにつく当たった人と、全く同じ本性を持った人間だったのです。親鸞聖人は、自らのことを煩惱具足の凡夫(煩惱だらけの愚かな人間)と受け止めておられます。掲示板の言葉に、「吾輩は凡夫である。自覚はまだない」「吾輩は猫である。名前はまだない」をアレンジしたものです。

いろいろな言われるんじゃないかということが心配です。(略) ひどいことを言われたら傷つくし、悲しくなるから言わないでいようと思うけど、そんなことを言ってしまうかもしれない。正直、どんなふうになるのか全然わからないです。」(二〇二二年二月二十七日「朝日新聞・夕刊」より)

これは、小学五年生の作文の一部です。「コロナで死ぬことより、感染した後にいろいろ言われるんじゃないか」というところが心配です。」というところから、新型コロナウイルスに感染していない人たちが苦しめているものは、病気のものではありません、病気に伴って生まれる差別や偏見だということに気づかれます。

ただ、この作文の中で私の心に突き刺さったのは、後半の部分でした。私だったら、「ひどいことを言われたら傷つくし、悲しくなるから言わないでいよう」と思いますが、「ひどいことを言われたら傷つくし、悲しくなるから言わないでいよう」と思ってしまうかもしれない。正直、どんなふうになるのか全然わからないです。」と書いています。とても正直な思いです。とても正直な思いです。とても正直な思いです。

「何かおきるか分からないこの人生を、何をしないでかすか分からないこの私が、生きていく」という言葉を残されています。「何が起きるか分からない人生」だということ、それは、時々、気づかせていたかと思いますが、「何をしないでかすか分からないこの私」だということには、なかなか気づけていないのではないのでしょうか。

「何をしないでかすか分からないこの私」だということには、なかなか気づけていないのではないのでしょうか。この写真を見てください。この写真は、今熊野商店街で写真店を営んでいた村中秀光さんが、空襲の数日後に撮影されたものです。寄せ集められた瓦礫で道路が埋め尽くされている様子が窺えます。

一九四五年一月十六日、京都に初めての空襲がありました。馬町空襲です。正確な死者数は不明ですが、四十人以上の方が亡くなり、三〇〇戸以上の家屋が被災したといわれています。女専の第三小松寮と京都幼稚園も直撃を受け、大破しました。

この写真は、今熊野商店街で写真店を営んでいた村中秀光さんが、空襲の数日後に撮影されたものです。寄せ集められた瓦礫で道路が埋め尽くされている様子が窺えます。この写真は、今熊野商店街で写真店を営んでいた村中秀光さんが、空襲の数日後に撮影されたものです。

八月六日に縁あって広島を訪れた。広島原爆の日である。敗戦後十七年を過ぎた。当時の状況を十分に学びつつ被爆者の話を直接聞くことができる世代は、今の学生の皆さんがほとんど最後であろう。被爆者には語り部もおられるが、ご自身の体験を語ることをされなかつた方も少なくないと思う。思い出すこと自体が強い苦痛である方もおられるであろうし、言語に絶する体験を伝えることの困難さを思われた方もおられるものと想像する。

親鸞が尊敬した中国の高僧に曇鸞がいる。曇鸞は「非常の言は常人の耳に入らず」という言葉を残している。仏法は常識人(常人)の思慮を超えた非常なる教えであって、それは自己の経験にとらわれる常人には容易に受けとめ難いのである。言語を絶する体験を、私たちが言葉だけでその体験者と同様にすることは難しい。もちろん、戦争体験と仏法とは別文脈の話でもある。けれども、被爆者の声を聞くことができる最後の世代であることを思い、精一杯の想像力を働かせて、その経験を聞く努力は私たちにできるのではないだろうか。(義)

京女への通学路 いまむかし

④1945年 京都・馬町空襲



一九四五年一月十六日、京都に初めての空襲がありました。馬町空襲です。正確な死者数は不明ですが、四十人以上の方が亡くなり、三〇〇戸以上の家屋が被災したといわれています。女専の第三小松寮と京都幼稚園も直撃を受け、大破しました。

この写真は、今熊野商店街で写真店を営んでいた村中秀光さんが、空襲の数日後に撮影されたものです。寄せ集められた瓦礫で道路が埋め尽くされている様子が窺えます。この写真は、今熊野商店街で写真店を営んでいた村中秀光さんが、空襲の数日後に撮影されたものです。

八月六日に縁あって広島を訪れた。広島原爆の日である。敗戦後十七年を過ぎた。当時の状況を十分に学びつつ被爆者の話を直接聞くことができる世代は、今の学生の皆さんがほとんど最後であろう。被爆者には語り部もおられるが、ご自身の体験を語ることをされなかつた方も少なくないと思う。思い出すこと自体が強い苦痛である方もおられるであろうし、言語に絶する体験を伝えることの困難さを思われた方もおられるものと想像する。

親鸞が尊敬した中国の高僧に曇鸞がいる。曇鸞は「非常の言は常人の耳に入らず」という言葉を残している。仏法は常識人(常人)の思慮を超えた非常なる教えであって、それは自己の経験にとらわれる常人には容易に受けとめ難いのである。言語を絶する体験を、私たちが言葉だけでその体験者と同様にすることは難しい。もちろん、戦争体験と仏法とは別文脈の話でもある。けれども、被爆者の声を聞くことができる最後の世代であることを思い、精一杯の想像力を働かせて、その経験を聞く努力は私たちにできるのではないだろうか。(義)

令和4年10月 月例礼拝日程表

日	曜日	講時	対象学生	担当
3	月	1	現社1A・1B	西・打本
		2	史学1A・1B	内手・西山
		4	児童1	黒田
4	火	1	心理1	藤井
		3	造形3A・3B	赤井・西
		4	英文3A・3B	森田・清基
5	水	1	養育1	野呂
		3	国文3A・3B	小池・中西
6	木	1	現社3C・3D	釋氏・藤井
		4	現社3A・3B	川元・那須
7	金	1	食物1A・1B	打本・井上
		2	心理3	普賢
		3	児童3	塚本
11	火	1	教育3	黒田
12	水	1	法学3A・3B	普賢・西
		1	現社1C・1D	那須・西山
14	金	2	教育1	井上
		4	英文1A・1B	塚本・川元
		1	造形1A・1B	井上・南條
17	月	2	食物3A・3B	黒田・西
		3	国文1A・1B	中西・壬生
		1	法学1A・1B	西・赤井
18	火	1	養育3	小池
19	水	2		
24	月	4	史学3A・3B	壬生・中西



研究も人生も「偶然」をどう活かすか

文学部教授 山田 雅彦

前任校も入れると、本学教員生活も今年で三十四年目、秋には六十五歳となって来春には定年退職するところまででした。

手にする本はたいい地誌もので、万人に不評の人文地理学の授業が面白

いと公言して不思議がられる変人でした。歴史学の現代的課題などを議論している「進歩的な先輩」(偏見でごめんなさい)からすると、まことにノンポリな凡人だったわけ

です。当時廃れつつあったとはいえ、大塚史学系、マルクスの唯物史観に関する学術書をまずは読むのが目覚めた学生の定番

だったときに、私はまったく別の関心からウェーバーやマンスフィールドや羽仁五郎の都市論を読

み、そしてシカゴ学派の都市社会学まで古本で買ったものです。

ひとはアメリカ史も面白いかも、と思ったことさえありましたが、書店で見つけた軽いフランス都市紀行本が決め手となつて西洋中世史の先生

(偏見でごめんなさい)に卒論の相談したのはよく覚えていません。先生はそれならと仏語で書かれた中世フランス・シャンパーニュ地方の都市史の研究書を手渡してくれ

た。しばらくして、今度は経済学部の西洋経済史の先生を紹介され、その先生からも、同じシャンパーニュ地方を対象とする「伯領」形成史という

自分の研究の興味を考へ、研究の裾野を広げる鍛錬になったようにも思

います。シャンパーニュ地方で大規模な定期市(大市)が開催されてい

たことから、私はその後西欧中世の市場の意義という問題に焦点を当てる

ことで、中世ヨーロッパ市場史の研究に広く取り組むようになりました。

また、シャンパーニュ伯がその発展に関与していることが明白なことか

ら、中世の地方権力と経済現象の関係を再考する

という問題群が見えてきました。かつて大塚史学

が取り組んでいた古いテーマですが、私は研究

途中からそれらの古い問題関心と対峙することに

なり、自分なりに新しい方向性を示せる可能性を感じました。

フランス行きの留学試験には失敗しましたが、

代わつて受けたベルギー政府の試験にパスし、

フランドル地方のヘントに二年間滞在する機会を得

ました。これも偶然の産物と言えそうで、やはり

西洋経済史の先生の助言があつて実現したもので

です。フランドル、そこは言わずと知れた中世

ヨーロッパ経済の一大中心地。市場史に取り組む

私にとっては、実は行くべき留学先であつたように

思います。公用語であるオランダ語など全然勉強してい

なかつた私は、暗中模索の状態

でヘント大学に行き、最初は本当に戸惑い

ましたが、ヘントの学風は

実に心地よいもので、少しづつオランダ語も読

むようになりました。中世ヨーロッパ都市史研究

の世界には長くピレンヌという巨人が聳え立っ

ていました。当時のヘント大学はフルビュルスト

教授を中心に、まったく新しい都市史の構築に取

り組んでいました。その新鮮な学風は私を鼓舞し

ました。ヘントでの私は本場の研究論文を踏査し

ては、毎日のように文献をコピーし、帰国後も

ばらばらに、ヘントなどフランドル諸都市の発展

あるいはフランドル地域の論文を書き続けまし

た。数年後、「中世フランドル都市の発展と在

地流通」が私の学位論文となつたのも、偶然の留

学生活活には考えられま

せん。

このように、私の研究

人生の転換にはいつも「偶然」が関わっています。

それでも、その偶然を活かそうとした自負はあり

ます。格好良いとは言

ませんが、「偶然」を「後付け」する、研究と関連

づけていうならば、与えられた場を理解し、どの

ような使い方があるのかよく知ろうとしてきたよ

うに思います。研究とは対象とする素材の分析か

ら何かをつかみ取ることですが、私は新世界を理

解するために常に先行研究をやや広めに蒐集しま

した。その作業が自分の地平線を広げてくれまし

た。

シャンパーニュ地域史が西欧市場史に、そして

フランドル都市・市場・伯領史に、そこから権力

と経済の関係、転じてし

て市場と流通の管理の歴史、そして管理となれば

都市当局による文書行政の歴史、また市場と流通

に欠かかせない貨幣の歴史、さらに枝分かれして

中世初期の定住史、このように私の関心は次々と

広がってきました。棚から牡丹餅こそは、けつし

て粗末にははいけないということでしょう。

京女生の皆さんも、瞬時でも面白いと思つたこ

とを大事にし、ちよつとしたチャンス

を存分に活かしてください。そして

人生とは時に大きく転換するものと思つた方が生

きやすい。

アップル社創設者のスティーブ・ジョブズ、俳優

リチャード・ギアやベネドikt・クルス：彼らの共通点が「熱

心な仏教徒である」ということは、日本におい

て知られていない。

アメリカ合衆国の主流の宗教は、キリスト教プロテ

スタントだが、現在仏教人口は伸び続け、将来ユ

タヤ教を抜き第二位の宗教となる可能性が高い。

何故アメリカ人は、仏教に魅了されてくるのか？

その疑問に答えてくれるのが本書である。

著者の武蔵野大学名誉教授で日系三世のタナカ氏は、

一九四七年山口県に生まれ、一九五八年に日系二世の

両親と渡米し、カリフォルニア州マウンテンビュー

市の真宗寺院に幼少期から通つたという。スタンフォ

ード大学卒業後、米国防立大学院と東京大学から修

士号を、

カリフォルニア大学バークレー校から博士号を授

けられた浄土教研究者の氏は、真宗僧侶であり、ア

メリカ仏教研究の第一人者でもある。

全七章からなる本書の第一章では、仏教の認知度

をアメリカで高めたセレブたちを紹介し、仏教人口

を「仏教共感者(ナイト・スタンダード・フ

・フレイスト)」に教に影響を受けた人」に三

分類した上で、その驚異的な増加について解説

する。第二章ではアメリカ仏教百

五十年史を論じつつ、十九世紀にアメリカ大陸に

上陸した仏教が、二十世紀に価値観の転換を求め

るビートニク達により再発見され、

カウンター・カルチャーを経て、新たな姿をあら

わした経緯を明かす。第三章では、アメリカ仏教

の五つの特徴(平等化・行中心・社会参加・

過去カナダ開教使として国際伝道に携わり、

アメリカ仏教を研究する私自身も、氏の意見に首肯

する。未来、世界に向けて仏教の持つ可能性は、

無限大なのだから。

(釋氏 真澄)

法のことば

まことを語れ 腹をたてるな

もとめられれば 乏しくあれど

分かち与えよ この三つにて

まことのしあわせ 得る身とな

ろう

ダンマパダ 二三四
京都女子大学 聖典 一一二頁

幸せになりたい、という人には、この詩にその秘訣が三つ示されています。その三つはいずれも、他者にいかに向きあうか、ということに関わります。でも本当にこれで幸せになれるんですか、という声も聞こえてきそうです。ここで説かれた事柄は、たとえば古い「ラッキーカラー」とは異なります。こうすれば、あなたの願いが叶います、とか、幸運が舞い降ります、とかいった話ではありません。こうした生き方のうちにこそ、本当の幸せが見出されると釈尊は説くのです。そしてこの教えを受け止めたとき、私の生き様が問われることになりま

す。折にふれて偽りを語り、腹をたててばかりで、貪りの心を捨てることのない自身の姿がみえてこないといいましょうか。仏教は、私の姿を照らし出し、その私が歩むべき道を照らし出すのです。(藤井 隆道)

ませんが、「偶然」を「後付け」する、研究と関連づけていうならば、与えられた場を理解し、どのような使い方があるのかよく知ろうとしてきたように思います。研究とは対象とする素材の分析から何かをつかみ取ることですが、私は新世界を理解するために常に先行研究をやや広めに蒐集しました。その作業が自分の地平線を広げてくれました。

アップル社創設者のスティーブ・ジョブズ、俳優リチャード・ギアやベネドikt・クルス：彼らの共通点が「熱心な仏教徒である」ということは、日本において知られていない。アメリカ合衆国の主流の宗教は、キリスト教プロテスタントだが、現在仏教人口は伸び続け、将来ユタヤ教を抜き第二位の宗教となる可能性が高い。何故アメリカ人は、仏教に魅了されてくるのか？ その疑問に答えてくれるのが本書である。著者の武蔵野大学名誉教授で日系三世のタナカ氏は、一九四七年山口県に生まれ、一九五八年に日系二世の両親と渡米し、カリフォルニア州マウンテンビュー市の真宗寺院に幼少期から通つたという。スタンフォード大学卒業後、米国防立大学院と東京大学から修士号を、カリフォルニア大学バークレー校から博士号を授けられた浄土教研究者の氏は、真宗僧侶であり、アメリカ仏教研究の第一人者でもある。全七章からなる本書の第一章では、仏教の認知度をアメリカで高めたセレブたちを紹介し、仏教人口を「仏教共感者(ナイト・スタンダード・フレイスト)」に教に影響を受けた人」に三分類した上で、その驚異的な増加について解説する。第二章ではアメリカ仏教百五十年史を論じつつ、十九世紀にアメリカ大陸に上陸した仏教が、二十世紀に価値観の転換を求め

る。過去カナダ開教使として国際伝道に携わり、アメリカ仏教を研究する私自身も、氏の意見に首肯する。未来、世界に向けて仏教の持つ可能性は、無限大なのだから。(釋氏 真澄)

『目覚める宗教』

(アメリカに出会った仏教―現代化する仏教の今―)

ケネス・タナカ著 サンガ 二〇二二年

シリーズ 智慧の蔵 46



お知らせ

＊本願寺書院・飛雲閣拝観(後期)＊

日時：10月12日(水) 15:15~17:00
場所：本願寺書院・飛雲閣・唐門
募集人数：30名(先着順)
参加費：無料

＊秋の見学会(バスツアー)＊

日時：10月29日(土) 9:00~17:00
行先：石山寺・三井寺・ミシガンクルーズ
募集人数：22名(先着順)
参加費：1,500円

※申込方法等は京女ポータル、宗教部掲示板または宗教教育課(仮設校舎A2階)で確認してください。
※なお、今後の国内や本学の状況によりましては、開催が取り止めとなる場合があります。その場合は、京女ポータルにてお知らせします。

芬陀利華アンケート

読んだ感想やコメントをお寄せください。(すぐに答えられるアンケートです)

